

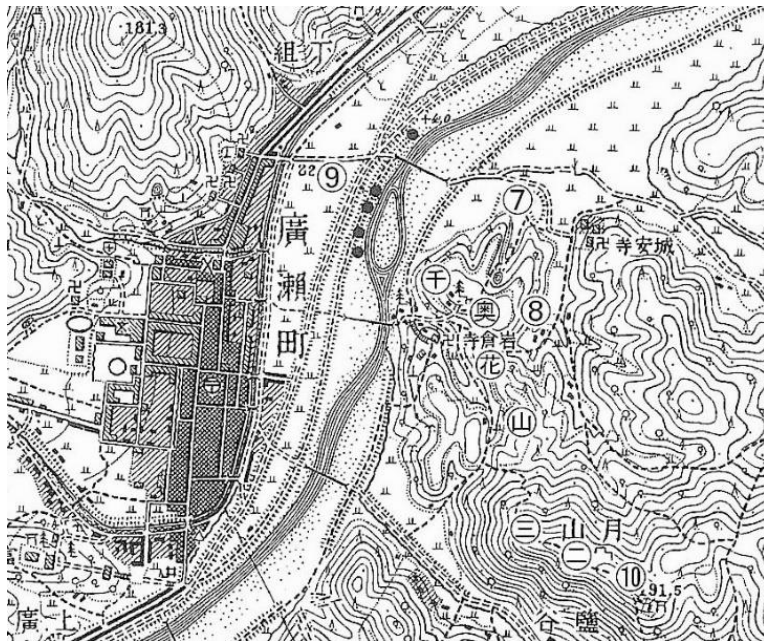
第 81 回 富田城下の寺院について

はじめに

松江城の築城は慶長 12 年（1607）から始まったとされ、慶長 16 年（1611）正月までには、本丸に天守が完成した。その後、城も城下町も整備が進み、能義郡富田（のぎぐんとだ、安来市広瀬町）から人々やものが多く移ってきたと考えられる。「思いがけない松江ができ、富田は野となる山となる」と里謡にあるように、尼子氏・毛利氏・吉川氏の城下として繁栄してきた富田の町が 17 世紀初めには急激に衰退していった。さらに、残った町並みも、50 年程経過した寛文 6 年（1666）年に、飯梨川（旧名富田川）の氾濫によりその大部分が河床下に埋没するのである。【図 1】【写真 1】【写真 2】

それから 350 年程が過ぎた現在、松江の築城期の様子は絵図資料や発掘調査により少しずつ分かってきだしている。一方、同時期の富田については、水没した寛文期の町並みを除いて、ほとんど知られていない。今も「まぼろしの城下町」なのである。

本欄では、今日に残る僅かな史料や絵図、さらに発掘調査成果から、富田城下に所在していた寺院の場所などについて探してみたい。



【図 1】 富田城跡と富田川（●点が寺跡などの位置）

『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』島根県古代文化センター

2013 年 3 月より転載



【写真 1】 富田城跡と富田川（飯梨川）河床（前方に富田橋が見える）



【写真 2】 第 7 次調査で河床に現れた寛文期の町並み、『富田川河床遺跡発掘調査報告書』Ⅲ、島根県教育委員会、1983 年 3 月より転載

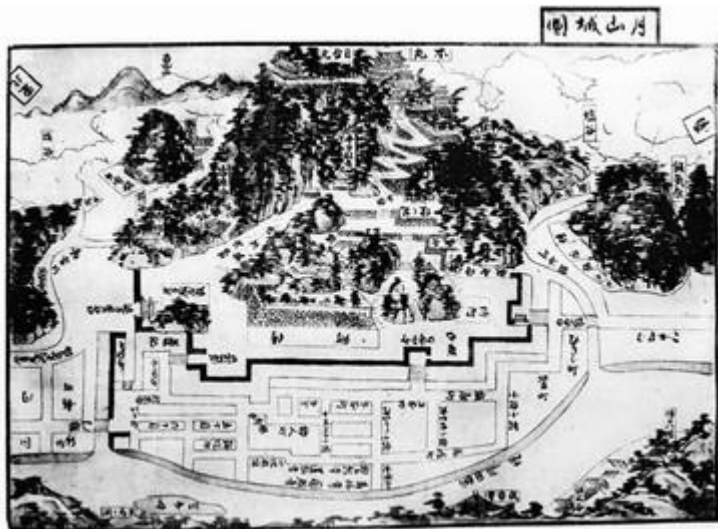
1. 松江に移転した寺院

江戸時代に書かれた『雲陽誌』には、富田から松江に移された寺院が18カ寺記載されている。それらの寺は松江市寺町に多く、誓願寺、専念寺、慈雲寺、長満寺、久成寺、本龍寺、明宗寺、妙興寺、信楽寺など10寺程がある。既に指摘されているように、城下町での寺院は防御の施設になり得るので、城下の主要部に寺町を置くのはよく知られている。

富田においても、江戸時代後期の「富田城絵図」の中に飯梨川の堤沿いに寺が数カ所集まって描かれている。『雲陽軍実記』（松陽新報社、1911年）に掲載の「月山城絵図」【図2】を見ると、本成寺、寿仙寺、圓照寺、誓願寺、蓮教寺が書かれている。絵図の時期や描かれている内容からみて、信憑性には問題はあるが、城下の一角に寺が集まっていたことは知られる。寺が描かれているのは、飯梨川左岸の新宮橋西詰めの河川敷から土手部にかけての場所と推定される。なお、川を挟んで対岸の山間（京羅木山〔きょうらぎさん〕など）には、敵方の陣城が築かれており、城下の西側の富田川近くは富田城防御の最前線となっていたと考えられる。

また、前述の『雲陽誌』に富田から松江へ移った寺として載る寺町の本龍寺（真宗大谷派）の絵画資料調査に、昨年（2018）11月、参加する機会があった。見せて頂いた「親鸞聖人真影」（軸）の裏書には、「雲州能義郡富田庄新町／浄専坊願主／釋祐俊」と書かれており、この記述は松江への移転を裏付けるものである（現在は、現物絵画裏書の「富田庄新町」等の文字は薄れて確認はできなかった）。こ

の寺院の前身は「浄専坊」といい、富田庄の新町に所在していた。所在地「新町」は、前述の「富田城絵図」からすると、富田城大手の付近（現在の城安寺北側）に位置することになる。推定される場所は新宮谷の入り口であり、菅谷の里御殿跡（絵図の「尼子殿屋敷」）の北側にあたる。しかし、この場所での発掘調査はほとんど行われておらず、今のところ遺構や遺物から新町という場所の町屋跡や寺跡を確認することはできないので、本龍寺の前身と考える浄専坊についても不明である。



【図2】『雲陽軍実記』掲載の「月山城絵図」

2.発掘調査で知られた富田の寺院跡

城下町跡の富田川河床遺跡での発掘調査は、昭和48年（1973）から始まり、昭和の末頃まで実施された。調査場所が富田橋から新宮橋の下流部までの河川敷が対象である。さらに、河川改修にかかる発掘調査のため、堤防の裾部において11m程の幅で、細長い溝状の調査区を設けたものであり、道路跡や建物跡などの遺構は部分的にしか確認できていない。【写真2】 【写真3】

6次（1980年）と7次（1981年）調査においては、富田橋から新宮橋間の左岸新宮橋西詰め調査区を中心に、来待石の砂岩製や大山産の安山岩製の石塔（五輪塔・宝篋〔ほうきょ〕印塔）が複数出土している。石塔は寺院の境内に存在した供養塔であろう。また、新宮橋の西詰め6次調査では、多くの燻（いぶし）瓦の丸瓦や平瓦が出土している。これらの瓦は、礎石建物の屋根に葺かれていたものであり、城下町に所在した寺院の本堂や門などの建物に伴う瓦と推定される。史資料の信憑性には問題があるが、「富田城絵図」などに描かれた富田川沿いの寺の可能性が高い。

これらの寺院跡の多くは、松江に移転したが、その跡は空き地になったと考えられる。それを裏付けるのが、7次調査の新宮橋と富田橋の左岸の中間部に当たる調査区（FU/FT区）であり、この場所では17世紀前半の遺構がほとんどなく、16世紀後半から17世紀初めの路地（径）が確認されているのみであった。また、南に隣接する調査区（GS区）からは、高さ1m程の石垣が14m以上の長さで見ついている。これは寺院を囲む土塀の下に存在する石垣と考えられる。さらに、付近には径1mの大型の井戸跡も存在した。石垣と井戸跡は川砂に覆われて発見されており、16世紀後半の一時期、川床に埋もれた時期もあったことを物語っている。この井戸跡の堆積層中より16世紀の中頃の陶磁器がまとまって出土している。【写真4】

新宮橋の下流側でも、6次調査において16世紀中頃から17世紀初めの石組溝跡が2条と、廃棄物の穴（土坑）が多数発見されている。土坑の中（SK015）には、16世紀中頃の中国の青磁、白磁、染付などの中国製陶磁器が複数セットで出土したものや、素焼きの皿（カワラケ）が大量に廃棄された穴（SK098）があり、寺院や館での三献（さんこん）などの武家儀礼に伴う宴会が行われていたことを裏付ける遺物である。この地点は、尼子氏の末期から堀尾氏の頃まで町屋ではなく、寺院などの特殊な建物があったと考えられる。



【写真3】寛文6年（1666）の町並みで、6m（3間）幅の道に沿って間口3間や6間の家が並ぶ。『富田川河床遺跡発掘調査報告書』Ⅲ



【写真4】戦国期末の石垣を検出（寺院跡か）。同前

おわりに

富田城下町跡は一級河川の飯梨川の河川敷に所在する遺跡であり、発掘調査を行うことは極めて難しい。また、文献史料や絵画資料も限られ、戦国から江戸時代初めの城下の様子を知る手だても少ない。そうした中、今回目にした松江に移転した寺院からの史料や情報は貴重なものであり、今後の史資料の発見にも期待している。

一方、発掘調査で検出された遺構や出土品からも、少なからず情報が得られる可能性がある。よって、建物跡や井戸跡等の遺構の検討や陶磁器等の再調査が必要と考える。

(松江城部会長／西尾克己／2019年5月30日記)